

夫婦のワーク・ライフ・バランスが夫婦関係、 家族成員のストレス、家族機能に及ぼす影響 —大学生の家族に焦点を当てて—

尾形 和男* 坂西 友秀** 福田 佳織*** 森下 葉子****

*学校教育講座 (心理学)

**埼玉大学

***東洋学園大学

****文京学院大学

A Study on the Influence that Husband and Wife's Work-Life Balance has on Marital Relationships, Family Members' Stress and Family Function: Focusing on College Student's Family

Kazuo OGATA*, Tomohide BANZAI**,
Kaori FUKUDA*** and Yoko MORISITA****

*Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Saitama University, Saitama 338-0825, Japan

***Toyo Gakuen University, Nagareyama 270-0161, Japan

****Bunkyo Gakuin University, Fujimino 356-8533, Japan

要 約

大学生のいる共働き家庭186世帯について、夫婦のワーク・ライフ・バランスが家族の夫婦関係、家族成員のストレス、家族機能形成に及ぼす影響について検討した。その結果、夫婦揃って家庭関与を基盤として仕事に関わる場合には、夫婦の一体感が高く、結合性・表現性などの健康な家族機能が形成されることが示された。しかし、母親が父親以上に仕事と家庭に関わる場合には妻のストレスが高くなることも示された。さらに、大学生のストレスには母親のストレスが関連していることも併せて確認された。

Keywords : ワーク・ライフ・バランス、夫婦関係、家族成員のストレス、家族機能、大学生

問題と目的

ワーク・ライフ・バランス (Work-Life Balance: 以下、WLB) は生活の質を向上させるために、仕事と家庭生活の両立を念頭に置いた概念であり、1998年WLB憲章が制定されて以来生活の質の向上に向けた各種の取り組みが行われてきた。その背景にある促進要因の一つとして、女性の社会進出に伴う共働き家庭の増加が顕著になっていることに伴い(内閣府、2010)、男性のみならず女性を含んだ家族成員の精神的健康にも関連する問題を含んでいることが挙げられる。

WLBが注目されるようになってから、特に女性の精神的ストレスとの関連性で問題が指摘されるようになって来た。その中でも特に、ライフコースの中でも

女性に負担が多くかかる乳幼児期では子育てを通して妻の精神的負担を軽減するために、夫の関わり的重要性が指摘され、夫の子育てを中心とする家庭関与に視点を当ててより現実的な観点から検討されている研究が多い (eg, 柏木・若松、1994; Lieberman, Doyle & Markiewicz, 1999; Kitmann, 2000; 尾形、1995; 尾形・宮下、2000; 菅原ら、2002; 加藤、2004; 尾形・宮下・福田、2005; 青木・岩立、2005)。これらの先行研究は、最近指摘されているWLBの視点を基盤としたものではなく、夫の家庭関与により妻のストレス軽減やそれに基づく子育てへの環境改善を検討したものである。しかし、WLBの基本的考え方を支える結果につながるものであり、夫婦のストレスの問題のみならず、子どもの発達・適応の諸問題も関連する重要な問

題を検討する上で示唆に富む内容が多い。

一方、女性の社会進出が進行する現在、女性を取り巻く状況が変化しつつある。それらの変化の中に、晩婚化、女性の社会進出、少子化、平均寿命の伸びなどが挙げられる。これらの状況は女性の生き方そのものを変化させているとされている(柏木、1999)。その具体的な現象の一つとして、平均寿命の伸びに伴い子どもが独立した後の夫婦の生活期間が従来以上に長くなり(井上・江原、2005)、夫婦だけの生活をどのように過ごすかと言うことが新たな課題としてWLBに組み込まれてきており、女性の立場から見ると、子どもが独立した後の夫と共に過ごす時間の構成と同時に自己の時間をいかに構成し過ごすか、という課題が存在することを示す。しかし子どもの独立の時期に関わる夫婦生活の過ごし方に関し、WLBとの関連で検討した研究は殆ど報告されていない。このことに関連して、Carter & McGoldric (1980) は家族の発達段階をライフステージに基づいて6段階に分類し、各段階の中に家族成員相互の関係に基づいて変化する事項とそれに対応すべき課題を示している。子どもが自立する時期に相当する課題として次のことを示している。第5段階は青年期の子どもを持つ時期であり、発達に不可欠な家族システムの第2次変化として、1. 青年が家族システムに出入りできるように親子関係を調節する。2. 中年の夫婦関係、職業上の達成に再び焦点を合わせる、の2つを課題として指摘し、第6段階は子どもの独立と移行が生ずる時期であり、発達に不可欠な家族システムの第2次変化として、1.2者関係としての夫婦間関係の再調整、2. 親子関係を成人同士の関係に発展させる、ことを課題として指摘している。同様にBerman & Life (1975) はライフステージに基づいて7段階に分類し、第6段階(43歳~59歳)は子どもの自立を迎えることにより、夫婦関係はいっそう親しい関係状態になるか、心理的に離れていくかのいずれかに進みやすいとしている。両理論共に子どもが独立して家庭を離れる前後は、夫婦関係の再調整が家族の発達課題として存在することを指摘している。したがって、この時期の夫婦は長い期間に渡る性別役割分業体制と夫婦の心理面のギャップから見て、相互の調整が極めて重要な時期に相当するが、子どもの独立を促すことが課題として存在する一方、子ども自身の将来に向けた意識を促進するための基盤作りも課題として存在することになる。

上記のような視点から見ると、夫婦関係は家族成員にとって極めて重要な位置づけを持つのであるが、WLBとの関連で夫婦関係について検討を加えた報告が見られる。山口(2007)は、WLBの指標として家庭生活について休日の「くつろぎ」、「食事・育児」、「趣味・娯楽・スポーツ」、平日の「食事」、「くつろぎ」などの夫婦の共有生活時間と夫の育児分担割合など、夫

婦の共有するWLBに関する変数が夫婦関係満足度に大きく影響することを指摘している。また金井(2002)は、仕事と家庭の両方に強く関わる場合ほどワーク・ファミリー・コンフリクトが有意に低いこと、さらには、そのワーク・ファミリー・コンフリクトは仕事満足、家庭満足感、生活全体の満足感の低下を引き起こし精神的健康にも影響をもたらすことを指摘している。同様に尾形(2010)は、大学生を対象とした調査から、父親が家庭への関与を中心として仕事への関与も行うWLBを行っている場合に学生は自分の両親について良好な夫婦関係であると認識し、学生自身は将来に向けて「仕事や家庭生活・地域・個人のバランスを優先させたい」とするWLB観を有することを示している。これらの先行研究から示唆されることは、家庭への関与を十分にとりながら仕事をはじめとする他の領域(地域活動、余暇時間の活用)への関与を行うWLBの場合には、総じて夫婦関係が良好であり、家族成員の精神的健康も良好であるということである。

大学生を持つ家庭の場合、ライフステージの過去の夫婦関係とは異なりその関係の再調整が課題として存在し、夫婦関係の新しい構造が求められることが多くなると考えられる。これは、コミュニケーションの在り方を含めて、共働き家庭の夫婦のWLBの在り方を再点検する必要性を含むことになると考えられる。ライフステージのこの時期に夫婦関係の在り方を再考しながら求めるWLBは、他のライフステージのWLBとは異なる特徴を有するものと推測されるが、家庭に及ぼす影響を含めてその特徴を検討することは青年期の大学生を有する家庭の状況を明らかにするうえで不可欠と考える。

以上の視点に基づき、本研究では大学生のいる共働き家庭に焦点を当てて、夫婦によるWLBが家族や子どもである大学生や家族成員に及ぼす影響について探索的に検討する。具体的には、I. 夫婦のWLBが夫婦関係、夫・妻・大学生の精神的ストレス、家族機能形成に及ぼす影響について検討する。次に、II. 大学生のストレスと夫婦関係、父親・母親のストレスとの関連性について分析検討することを目的とする。

方法

1. 調査対象者

埼玉県、東京都、千葉県、愛知県在住の大学生とその共働き家庭(父親と母親)186世帯。(1) 職業:(夫<会社員82名、教員13名、公務員13、自営業19名、その他36名、不明23名)、妻<会社員21名、教員12名、公務員6名、パートタイム123名、その他24名)。(2) 大学生の性別:男性52名、女性118名、不明16名。(3) 大学生の平均年齢:(男性:19.73歳、女性19.57歳)。

2. 調査用紙

妻用：1. ①夫・妻の職業 ②家族構成 ③大学生の年齢と性別を問う項目。2. 妻のWLBを測定する22項目 [尾形 (2010) を参考に作成]。3. 妻から見た夫婦関係を測定する20項目 [諸井 (1997) を参考に作成]。4. 妻のストレスを測定する20項目 [清水・今栄 (1981)]。**夫用**：1. 夫のWLBを測定する22項目 [尾形 (2010) を参考に作成]。2. 夫から見た夫婦関係を測定する20項目 [諸井 (1997) を参考に作成]。3. 家族機能を調べる20項目 [渡辺 (1989)]。4. 夫のストレスを測定する20項目 [清水・今栄 (1981)]。**大学生用**：1. 大学生のストレスを測定する20項目 [清水・今栄 (1981)]。2. 妻の子どもである大学生の過ごし方について問う項目・岡本 (2005)]。上記の各質問紙は妻用、夫用、大学生用別々に冊子にしたものを1家庭分まとめて封筒に入れた。アンケートの趣旨説明、アンケートは個人のデータとして扱うのではなく全体としてまとめて統計処理をし、シュレッターで処理する旨説明をした上で、アンケートの記入に了承して頂いた学生や家庭に配布した。各家庭で夫と妻、大学生に別々に記入していただいたものをまとめてもらい、同封の封筒で郵送により回収した。本研究では目的から、妻用の質問紙1～4、夫用の質問紙1～4、大学生用の質問紙1を分析の対象とした。

3. 調査時期

2011年9月～2012年5月

結果

1. 質問紙の構造化

本研究で使用した質問紙がどのような構造から構成されているのかを明らかにするために、各質問紙について因子分析 (主因子法、*promax* 回転) を実施した。

(1) 妻と夫のWLBを測定する質問紙

妻のWLBを調べる調査用紙 (22項目) について因子分析を実施した。因子負荷量.35以上の項目を基準にして、3因子を抽出した。第1因子は「仕事中心」、第2因子は「家族との交流」、第3因子は「余暇時間の活用」と命名した。第1因子から第3因子まで、項目の信頼性を確認するために α 係数を算出したところそれぞれ順に、.791、.738、.697であり信頼性が確保されていることが示された (Table 1)。

次に夫のWLBを調べる調査用紙 (22項目) について因子分析を実施した。因子負荷量.40以上の項目を基準にして、4因子を抽出した。第1因子は「妻や家族との交流」、第2因子は「仕事中心」、第3因子は「余暇時間の活用」と命名した。さらに、第4因子は「近隣への関わり」と命名した。

第1因子から第4因子までの各項目の信頼性を

Table 1 妻のワーク・ライフ・バランスについての因子分析の結果 (主因子法*promax*回転後)

項目	F1	F2	F3
(仕事中心 $\alpha = .791$)			
12. 私は仕事があまくいっているときは、表情に出やすい	.698	-.014	-.025
13. 私は仕事の話をするとき、生き生きとしていると思う	.665	-.058	-.066
11. 私は、仕事が順調なとき、家族とよく話をする	.664	.000	-.003
8. 私は家族と話をするとき、仕事のことが多い	.592	-.084	-.165
9. 私は仕事のことで悩んだり喜んだりしている	.581	.074	.007
10. 私は休暇のときでも仕事のことが頭から離れないことがある	.535	-.054	.011
7. 私は家族に自分の生き方を話すことがある	.451	.202	.081
20. 時間を作って、自分が楽しめることをしたいと思う	.370	.026	.216
(家族との交流 $\alpha = .738$)			
5. 私は忙しくて家族との会話が少ない	-.112	.759	-.009
2. 私は家族で食事をするとき、仕事のことでなくいろいろな話をしている	-.083	.746	-.007
4. 私は子どもの将来のことによく相談にのる	.188	.633	-.078
3. 私は休暇のとき、家族のみんなを誘って出かけることがある	.139	.540	.090
1. 私は休暇のとき、夫と一緒にいる時間を大事にしている	-.042	.459	.169
6. 私は休暇のとき、家族とかかわらず、一人でのんびりとしていることがある	-.086	.412	-.331
(余暇時間の活用 $\alpha = .697$)			
15. 日曜日などは自分の時間を作って楽しむ	-.062	-.074	.775
14. 私は時間があるときは、自分の趣味を楽しむことがある	-.016	.091	.707
21. 自分の趣味など時間をとってゆっくりと楽しむのが好きだ	.169	.029	.616
18. 自分の趣味などいろいろなと関わる時間がない	-.182	.030	.383
因子相関	F1	F2	F3
		.130	
			.105

(数字のアンダーラインは逆転項目を示す)

確認するために α 係数を算出したところそれぞれ、.793、.788、.758、.779であり高い信頼性が確認された (Table 2)。

(2) 妻・夫から見た夫婦関係を測定する質問紙

妻から見た夫婦関係を測定する20項目について因子分析 (主因子法、*promax* 回転) を実施した。因子負荷量.40以上の項目を基準にして、2因子を抽出した。第1因子は「夫との一体感」、第2因子は「夫への要望」と命名した。またそれぞれの α 係数はそれぞれ、.963、.842と高い信頼性が確認された (Table 3)。

また夫から見た夫婦関係についても同様の方法で因子分析を行い3因子抽出された。第1因子は「妻との一体感」、第2因子は「妻への尊敬」、また、3因子は「妻への要望」と命名した。

またそれぞれの α 係数はそれぞれ、.931、.900、.802と高い信頼性が確認された (Table 4)。

(3) 妻・夫・大学生のストレスを測定する質問紙

妻・夫・大学生それぞれのストレスを測定するための質問紙についてもそれぞれ、因子分析 (主因子法、*promax* 回転) を実施した。因子負荷量.40以上の項目を基準にして、それぞれ2因子を抽出した。妻については、第1因子は「とらわれ思考」、第2因子は「不安・緊張」と命名した (Table 5)。夫について第1因子は

Table 2 夫のワーク・ライフ・バランスについての
因子分析の結果(主因子法 *promax* 回転後)

項目	F1	F2	F3	F4
(妻や家族との交流 $\alpha = .793$)				
1. 私は休暇のとき、妻と一緒にいる時間を大事にしている	.736	-.045	.004	-.058
2. 私は家族で食事をするとき、仕事のことでだけでなくいろいろな話をしている	.708	-.103	.105	-.060
3. 私は休暇のとき、家族のみんなを誘って出かけることがある	.629	.027	.020	.018
4. 私は子どもの将来のことにについてよく相談にのる	.627	.117	-.054	-.064
5. 私は忙しくて家族との会話が少ない	.522	-.162	.084	.181
19. 時間を作って妻と旅行などに行きたいと思う	.483	-.018	.065	-.041
7. 私は家族に自分の生き方を話すことがある	.474	.165	.047	.067
6. 私は休暇のとき、家族とかかわらず、一人でんびりとしていることがある	.406	.043	-.300	.116
(仕事中心 $\alpha = .788$)				
12. 私は仕事があまくいっているときは、表情に出やすい	-.074	.748	.037	.028
11. 私は、仕事が順調なとき、家族とよく話をする	.048	.647	-.012	-.048
9. 私は仕事のことで悩んだり喜んだりしている	-.034	.607	.007	-.119
10. 私は休暇のときでも仕事のことが頭から離れないことがある	-.081	.601	.026	-.157
13. 私は仕事の話をするとき、生き生きとしていると思う	.191	.590	-.007	.157
8. 私は家族と話をするとき、仕事のことが多い	-.012	.566	.007	.142
(余暇時間の活用 $\alpha = .758$)				
21. 自分の趣味など時間をとってゆっくりと楽しむのが好きだ	.023	.012	.867	-.024
15. 日曜日などは自分の時間を作って楽しむ	-.184	.063	.663	.168
14. 私は時間があるときは、自分の趣味を楽しむことがある	.117	.005	.662	-.054
20. 時間を作って、自分が楽しめることをしたいと思う	.207	-.013	.501	-.052
(近隣への関わり $\alpha = .779$)				
16. 町会など近隣の仕事に関わるのは楽しい	-.100	-.035	.008	.946
22. 休日など地域との関わりが多い方だ	.004	-.044	.069	.676
17. 町会など近隣の仕事に関わるのはおっくうである	.122	.072	-.092	.603
因子相関	F1			
	F2	.180		
	F3	-.071	.072	
	F4	.138	-.055	-.055

(数字のアンダーラインは逆転項目を示す)

「とらわれ思考」、第2因子については「不安・緊張」と命名した (Table 6)。大学生については、第1因子は「とらわれ思考」、第2因子は「不安・緊張」と命名した (Table 7)。

妻・夫・大学生それぞれの因子の α 係数は、.890、.882、.917、.903、.866、.827であり高い信頼性が確認された。

(4) 家族機能を測定する質問紙

家族機能については「結合性」①私の家族では、お互いに助け合ったり元気づけあうことがよくある ②私の家族は一体感を持っている ③私の家族は一緒に何かをすることが多い ④家族はお互いに仲良く暮らしている ⑤家族は、家にいるとお互いを避けているように感じる (逆転項目)。「表現性」①家族のみんなは、思ったことを自由に話す ②何か問題が起こっても、家族で話し合ってみんなで解決策を見出す ③

Table 3 妻の見る夫婦関係についての因子分析結果
(主因子法 *promax* 回転後)

項目	F1	F2
(夫との一体感 $\alpha = .963$)		
9. 夫との関係によって、私は幸福である	.917	-.060
7. 私と夫の関係は、非常に安定している	.874	-.042
2. 夫にはいろいろな話ができる	.872	-.033
8. 私たちの夫婦関係は、強固である	.863	.022
6. 私たちは、申し分のない結婚生活を送っている	.856	-.055
13. 夫婦がお互いを思いやっている	.846	.094
11. 私は夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う	.828	.070
14. 私が悩んでいるとき夫は相談相手になってくれる	.828	-.005
12. 夫は夫婦の会話を大事にしている	.824	-.097
3. 私は夫に何でも話ができる	.820	-.047
5. 私は夫から受けいられている	.794	.035
20. 私は夫とできるだけ一緒に出かけたり、旅行がしたい	.749	.116
19. 私は夫を尊敬している	.736	.028
1. 私は夫と納得の行くまで話をする	.711	-.015
10. 私は、まるで自分と夫が同じチームの一員のように、本当に感じている。	.702	.095
4. 夫に頼みたいことがあっても何となく言い出しにくい	.461	-.160
(夫への要望 $\alpha = .842$)		
16. 夫には家庭や家族のことについてできるだけ関心を持ってほしい	.019	.927
17. 夫には私の話をよく聞いてほしい	-.038	.907
18. 夫には今まで以上に子どもにかかわりを持ってほしい	-.181	.631
15. 夫には私の考えを受け入れて尊重してほしい	.162	.579
因子相関	F1	
	F2	.221

(アンダーラインの数字は逆転項目を示す)

Table 4 夫の見る夫婦関係についての因子分析結果
(主因子法 *promax* 回転後)

項目	F1	F2	F3
(妻との一体感 $\alpha = .931$)			
7. 私と妻の関係は、非常に安定している	.862	-.025	.027
13. 夫婦がお互いを思いやっている	.842	.030	.011
3. 私は妻に何でも話ができる	.823	-.003	.034
2. 妻にはいろいろな話ができる	.821	.059	-.023
5. 私は妻から受けいられている	.813	-.002	.015
8. 私たちの夫婦関係は、強固である	.758	.143	-.009
1. 私は妻と納得の行くまで話をする	.740	.008	-.050
6. 私たちは、申し分のない結婚生活を送っている	.737	.116	.082
4. 妻に頼みたいことがあっても何となく言い出しにくい	.516	-.111	-.088
(妻への尊敬 $\alpha = .900$)			
19. 私は妻を尊敬している	-.127	.823	-.067
9. 妻との関係によって、私は幸福である	.222	.715	-.063
20. 私は妻とできるだけ一緒に出かけたり、旅行がしたい	.047	.692	-.015
11. 私は夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う	.210	.645	.050
14. 私が悩んでいるとき妻は相談相手になってくれる	.310	.530	-.001
10. 私は、まるで自分と妻が同じチームの一員のようにであると、本当に感じている。	.311	.499	.027
(妻への要望 $\alpha = .802$)			
17. 妻には私の話をよく聞いてほしい	-.190	.163	.888
16. 妻には家庭や家族のことについてできるだけ関心を持ってほしい	.061	-.072	.805
15. 夫には私の考えを受け入れて尊重してほしい	-.029	.080	.660
18. 夫には今まで以上に子どもにかかわりを持ってほしい	.135	-.319	.562
因子相関	F1		
	F2	.765	
	F3	.186	.215

(アンダーラインの数字は逆転項目を示す)

家族でいろいろな問題を話し合い、その結論や解決策にみんなで賛同できるようにする ④私の家族では、みんなが自分の意見を表現することを大事にしている

Table 5 妻のストレスについての因子分析結果
(主因子法 *promax* 回転後)

項目	F1	F2
(とらわれ思考 $\alpha = .890$)		
18. 私はさささいなことに思いわずらうことがある	.879	-.059
14. 私は困難なことが重なりと圧倒されてしまう	.796	-.199
15. 実際には大したこともないことが気になってしかたがない	.790	.009
16. 私は物事を難しく考える傾向がある	.768	-.022
19. 私はひどくがっかりしたときには気分転換ができない	.757	-.046
13. 私はすぐに決心がつかず迷いやすい	.674	-.004
20. 身近な問題を考えるとひどく緊張し混乱する	.563	.206
17. 私はやっかいなことは避けて通ろうとする	.519	-.021
(不安・緊張 $\alpha = .882$)		
7. 私はイライラしている	-.102	.767
6. 私はビリピリしている	-.112	.758
9. 私はリラックスしている	-.123	.701
5. 私は気分が良い	-.107	.680
2. 私は安心している	-.024	.654
8. 私はなにかしら緊張している	.072	.638
1. 私は平静である	.011	.563
10. 私は心配事が多い	.341	.525
4. 私は不安である	.285	.478
3. 私は何かまずいことが起こりそうで心配である	.319	.454
因子相関	F1	F2
		.535

(アンダーラインの数字は逆転項目を示す)

Table 6 夫のストレスについての因子分析結果
(主因子法 *promax* 回転後)

項目	F1	F2
(とらわれ思考 $\alpha = .917$)		
14. 私は困難なことが重なりと圧倒されてしまう	.866	-.114
18. 私はさささいなことに思いわずらうことがある	.849	-.045
15. 実際には大したこともないことが気になってしかたがない	.824	-.027
19. 私はひどくがっかりしたときには気分転換ができない	.777	.059
17. 私はやっかいなことは避けて通ろうとする	.776	-.168
13. 私はすぐに決心がつかず迷いやすい	.727	-.021
16. 私は物事を難しく考える傾向がある	.673	.071
20. 身近な問題を考えるとひどく緊張し混乱する	.649	.165
(不安・緊張 $\alpha = .903$)		
2. 私は安心している	-.153	.843
6. 私はビリピリしている	-.050	.783
7. 私はイライラしている	-.041	.764
9. 私はリラックスしている	-.011	.697
4. 私は不安である	.140	.693
5. 私は気分が良い	-.142	.674
1. 私は平静である	-.055	.635
3. 私は何かまずいことが起こりそうで心配である	.218	.547
10. 私は心配事が多い	.276	.526
8. 私はなにかしら緊張している	.327	.486
因子相関	F1	F2
		.586

(アンダーラインの数字は逆転項目を示す)

⑤私たちは、個人の抱えている問題について、お互いに話すことが多い。「権威的」(①私の家族では、親が重要な決定をすることがある ②私の家族では、規則を破ると厳しく罰する ③家族のメンバーは、何か悪いことをすると罰せられる ④私の家族では、規則が多い方である ⑤私の家族ではあれこれ命令することはない〈逆転項目〉)。「民主的」(①家族のメンバーは、生活の決まりを共に作ってきた ②家族のメンバーは、問題解決にあたって、意見を出して解決しようとする ③私の家族では、何かを決めるときみんなが一言でも発言できる。④私の家族では、約束を守らなかった時の対処の方法を一緒に考えてきた ⑤私の

Table 7 大学生のストレスについての因子分析結果
(主因子法 *promax* 回転後)

項目	F1	F2
(とらわれ思考 $\alpha = .866$)		
16. 私は物事を難しく考える傾向がある	.847	-.178
15. 実際には大したこともないことが気になってしかたがない	.727	.000
18. 私はさささいなことに思いわずらうことがある	.720	-.129
11. 私は疲れやすい	.707	-.044
10. 私は心配事が多い	.536	.304
7. 私はイライラしている	.518	.102
14. 私は困難なことが重なりと圧倒されてしまう	.451	.240
6. 私はビリピリしている	.436	.189
13. 私はすぐに決心がつかず迷いやすい	.420	.178
(不安・緊張 $\alpha = .827$)		
2. 私は安心している	-.136	.776
9. 私はリラックスしている	-.121	.740
4. 私は不安である	.161	.618
1. 私は平静である	-.084	.583
5. 私は気分が良い	.105	.551
8. 私はなにかしら緊張している	.168	.524
3. 私は何かまずいことが起こりそうで心配である	.136	.520
因子相関	F1	F2
		.695

(アンダーラインの数字は逆転項目を示す)

家族では、大切なことを決定する前に、親が子どもの了解を得るようにしている)の4機能を用いたが、 α 係数はそれぞれ順に.837、.874、.710、.733であり高い信頼性が確認された。

2. 夫婦のWLBが夫婦関係、家族成員のストレス、家族機能形成に及ぼす影響についての検討

夫婦のWLBが家族の夫婦関係、家族成員のストレス、家族機能にどのような影響をもたらすのかを明らかにするために、因子分析によって抽出された各因子について、各因子の下位尺度平均得点を算出した。

次に、妻と夫のWLBの各因子得点に基づいて、夫と妻を分類し群分けした。群間にどのような構造が存在するのかを確認するために各因子の下位尺度得点をZ得点に換算し、階層的クラスタ分析(Ward法)を行った。抽出したデンドログラム及び解釈可能性から4つのクラスタの構造を妥当と判断した(Figure 1)。クラスタIは妻も夫も仕事、家庭、余暇時間、地域への関わりが高いので「夫婦高活動型」とした。クラスタIIは妻が家庭と仕事への関わりが高く、夫は家庭への関わりが高いので「妻仕事と家庭・夫家庭型」とした。クラスタIIIは妻が家庭関与、夫は地域交流に関わっているため、「妻家庭・夫地域関与型」とした。クラスタIVは夫の余暇時間だけが相対的に高いので「夫余暇時間の活用型」とした。

以上のような妻と夫のWLBによって構成されている群のパターンによって、夫婦関係、家族成員のストレス、家族機能にどのような差異が生じているのだろうか。目的Iを検証するために、4つのクラスタを独立変数、夫婦関係、家族成員のストレス、家族機能を従属変数とする一元配置分散分析を実施し、クラスタ間に有意差が見られた場合はさらにTukeyによる

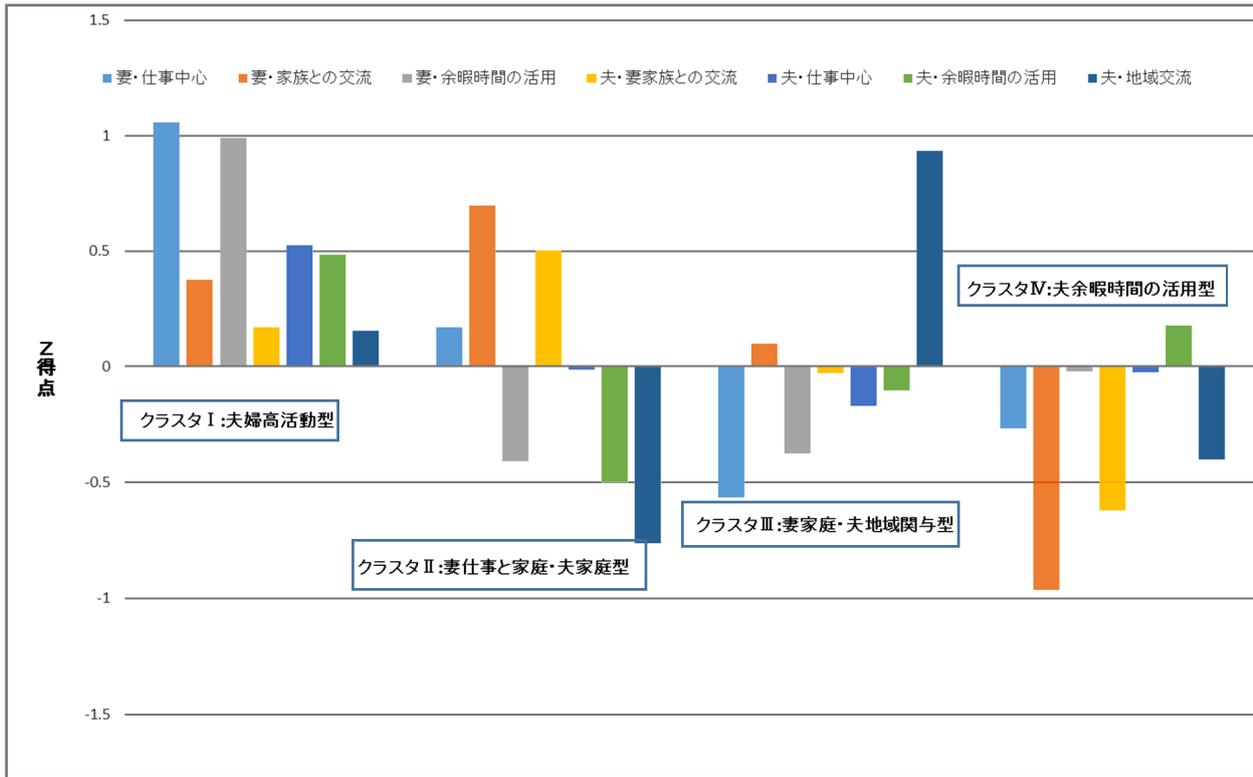


Figure 1 夫婦によるワーク・ライフ・バランス

Table 8 クラスタ別に見た夫婦のワークライフバランスと夫婦関係、家族成員のストレス、家族機能

		クラスタ I		クラスタ II		クラスタ III		クラスタ IV		F値	多重比較
		M (SD)	N								
共働き家庭 (186世帯)											
妻の見る	夫との一体感	4.00 (.64)	26	4.00 (.72)	38	3.66 (.67)	44	3.31 (.90)	34	6.75	I・II > IV**
	夫婦関係	3.76 (.85)	26	3.54 (.87)	40	3.36 (.71)	48	3.26 (.95)	35	2.10	
夫の見る	妻との一体感	4.02 (.68)	27	4.00 (.66)	41	3.65 (.68)	48	3.51 (.71)	35	5.11	I・II > IV*
	夫婦関係	4.31 (.49)	27	4.13 (.68)	41	3.85 (.69)	49	3.74 (.66)	34	5.35	I > IV** I > III* II > IV*
	妻への尊敬	3.34 (.80)	27	3.27 (.74)	41	3.14 (.68)	49	3.13 (.69)	34	.690	
妻のストレス	とらわれ思考	1.18 (.28)	26	1.27 (.30)	41	1.10 (.26)	49	1.14 (.32)	35	2.53	II > III*
	不安・緊張	2.48 (.65)	26	2.58 (.59)	41	2.43 (.60)	49	2.67 (.76)	35	1.33	
夫のストレス	とらわれ思考	2.70 (.86)	27	2.53 (.88)	40	2.57 (.66)	49	2.68 (.76)	35	.348	
	不安・緊張	2.44 (.53)	27	2.51 (.82)	41	2.43 (.58)	49	2.51 (.50)	34	.197	
大学生のストレス	とらわれ思考	3.18 (.96)	26	3.24 (.77)	41	2.99 (.84)	49	3.31 (.70)	34	1.23	
	不安・緊張	2.50 (.79)	26	2.59 (.67)	41	2.48 (.71)	49	2.63 (.79)	34	.360	
家族機能	結合性	3.93 (.43)	27	4.03 (.67)	41	3.87 (.60)	49	3.48 (.57)	34	6.17	II > IV*** I・III > IV*
	表現性	3.76 (.48)	27	3.53 (.81)	41	3.61 (.62)	49	3.28 (.62)	34	2.90	I > IV*
	権威的	2.63 (.79)	27	2.55 (.69)	40	2.89 (.54)	49	2.64 (.68)	34	2.15	III > II+
	民主的	3.29 (.49)	26	3.25 (.73)	41	3.32 (.58)	48	3.02 (.51)	34	1.84	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

多重比較を行った (Table 8)。

まず夫婦関係について、妻の見る「夫との一体感」はクラスタ I、クラスタ II ともにクラスタ IV よりも高かった。夫の見る「妻との一体感」では、妻の場合と同様にクラスタ I、クラスタ II ともにクラスタ IV よりも高かった。また「妻への尊敬」ではクラスタ I はクラスタ III 及びクラスタ IV よりも高く、クラスタ II はクラスタ IV よりも高いことが示された。

次に家族成員のストレスについて見ると、妻の場合にのみ有意差が見られた。具体的には「とらわれ思考」でクラスタ II がクラスタ III よりも高いことが示された。

さらに家族機能においては、「結合性」でクラスタ I、クラスタ II、クラスタ III がクラスタ IV よりも高いことが示された。「表現性」ではクラスタ I がクラスタ IV よりも高く、「権威的」ではクラスタ III がクラスタ II より高いことが示された。

3. 夫婦関係、夫と妻のストレスと大学生のストレスとの関連性についての検討

夫婦の WLB が夫婦関係、家族成員のストレス、家族機能形成に及ぼす影響について検討を加えたが、それでは夫婦関係と夫婦のストレスが子どものストレスにどのような関連性を有するのであろうか。目的 II に

Table 9 夫婦関係・夫・妻・子のストレスについての相関分析

	妻の見る夫婦関係		夫の見る夫婦関係			妻のストレス		夫のストレス	
	夫との一体感	夫への要望	妻との一体感	妻への尊敬	妻への要望	とらわれ思考	不安・緊張	とらわれ思考	不安・緊張
妻：とらわれ思考									
クラスタ I	.091	.175	-.062	-.391*	-.003				
クラスタ II	-.324*	.575**	.120	.089	.276				
クラスタ III	-.128	.277	-.023	.013	-.101				
クラスタ IV	-.001	.431**	-.025	-.054	-.070				
妻：不安・緊張									
クラスタ I	-.202	.067	-.033	-.072	.154				
クラスタ II	-.540**	.310	-.088	-.119	.024				
クラスタ III	-.203	.160	-.321*	-.190	-.113				
クラスタ IV	-.239	.081	.150	-.043	-.190				
夫：とらわれ思考									
クラスタ I	.242	-.207	-.191	-.132	.119	-.001	.017		
クラスタ II	.021	.017	-.390*	-.218	.006	.079	.042		
クラスタ III	.009	.077	-.137	-.155	.034	-.244	-.089		
クラスタ IV	.126	.014	.002	.026	-.276	.037	-.077		
夫：不安・緊張									
クラスタ I	.118	-.149	-.303	-.076	.013	-.230	.106		
クラスタ II	.057	-.059	-.259	-.248	.148	.088	.371*		
クラスタ III	-.128	.020	-.385**	-.313*	-.097	-.093	.330*		
クラスタ IV	-.150	.057	.368*	-.362*	-.237	.106	-.025		
大学生：とらわれ思考									
クラスタ I	-.203	.172	-.105	-.079	.288	-.001	.542**	-.027	.258
クラスタ II	-.090	-.148	.206	.199	-.066	.233	.151	.007	.040
クラスタ III	.060	-.341*	.157	.150	-.137	-.211	-.083	-.068	.024
クラスタ IV	-.104	.029	-.043	-.150	-.084	.172	.321	-.276	-.031
大学生：不安・緊張									
クラスタ I	-.139	.208	.084	.079	.335	-.034	.298	-.032	.038
クラスタ II	-.420**	-.221	-.055	-.134	-.120	.277	.330*	.137	.217
クラスタ III	.098	-.305*	.164	.180	-.070	-.130	.094	-.242	-.079
クラスタ IV	-.019	.097	-.064	-.127	-.269	.152	.303	.081	.342

** $p < .01$, * $p < .05$

について検討を加えるために、クラスタごとに夫婦関係、夫、妻のストレスと子どもである大学生のストレスとの関係について分析を加える。ここでは、各下位尺度得点に基づきスピアマンの積率相関係数を求めた (Table 9)。

クラスタごとに見ると、クラスタ I において夫の見る夫婦関係の「妻への尊敬」が妻のストレス「とらわれ思考」と負の、大学生の「とらわれ思考」が妻の「不安・緊張」と正の有意な相関を示した。クラスタ II では、妻の「夫との一体感」が妻及び大学生の「不安・緊張」と有意な負の、妻の「不安・緊張」が大学生の「不安・緊張」と有意な正の相関を示した。また、クラスタ III では妻の「夫への要望」が大学生の「とらわれ思考」、「不安緊張」と有意な負の相関を示した。

以上のように、クラスタ I、クラスタ II、クラスタ III において、大学生のストレスと関連することが示された。

考察

大学生の家族の夫婦による WLB が夫婦関係、家族成員のストレス、家族機能形成に及ぼす影響について検討を加えた。その結果、夫婦揃って家庭と仕事に関わる場合、夫と妻の認識する良好な夫婦関係に正の影響をもたらすことが示された。この結果は、家

庭関与を優先した WLB が良好な夫婦関係を形成する上で重要な要素であることを示唆していると考えられる。夫婦揃って家庭を中心とする関わりを持つことは、日々の生活を繰り返す中で夫婦の相互の意思疎通や共通した意識が存在し、基本的には夫婦間のコミュニケーションが不可欠のものであり、その過程に基づく活動の結果を示しているものと考えられる。この結果に関連して、Streich, Casper, Salvaggio (2008) は、共働き家庭では妻が夫と共有した認識を持つことが妻の良好な家庭生活を支えると言うことを指摘し、山口 (2007) は、夫婦のコミュニケーションが夫婦の満足度とその後の WLB に影響力をもたらすことを示している。尾形 (2010) も、大学生の家庭を対象として分析を加え、夫が家庭を中心とする関わりと仕事への関わりが高い場合に夫婦関係満足度が高いことを明らかにしている。本研究の結果はこれらの報告を支持する結果となっており、改めて夫婦間に共通した意識の存在が重要性であることが指摘できる。

また、家族成員のストレスについては妻の「とらわれ思考」についてクラスタ II がクラスタ III よりも高いことが示された。クラスタ II は妻と夫が家庭に関わる一方で、妻の仕事への関わりがかなり高く、仕事上の問題や悩みを多く抱えやすい状況に置かれている可能性が推測される。また、大学生である子どものストレスについてはどのクラスタにおいても有意差は確認され

なかった。この結果は、青年後期にある大学生は、発達的に見て生活の場が大学を中心として友人等との関わりを多く持ち、家庭以上に影響を受けるからと考えられる。

さらに、家族機能形成との関連性については、「結合性」「表現性」の健康的な家族機能はクラスタⅣが他のクラスタよりも低く、家族機能「権威的」はクラスタⅢがクラスタⅡより高く、夫婦の家庭関与を中心とするWLBが健康な家族機能形成に必要なことが改めて示された。この結果は従来指摘されてきた家族機能は夫婦関係を基に形成されるとする指摘（尾形、2007）を支持するものとなっている。

一方、クラスタごとに夫婦関係、妻と夫のストレス、大学生のストレスの関係について相関分析を加えたが、クラスタⅡにおいて、「夫との一体感」は妻の「不安・緊張」を減少させ、その不安緊張は大学生の「不安・緊張」を増加させる可能性があることが示された。またクラスタⅠでも妻の「不安・緊張」が大学生の「とらわれ思考」を増加させることも示唆されている。得られた結果こそ少ないものの、クラスタⅡは妻の仕事と家庭関与が夫よりも高く、妻にかかる負担が大きいため夫との精神的結びつきがストレス軽減には不可欠であると同時に、大学生のストレスにも関連すると推測される。同様にクラスタⅠにおいて妻も仕事と家庭関与など全てに関わり、バランスの取れた生活を送っている反面関わりの多さからストレスを発生しやすい状況にあるともいえ、そのことが大学生のストレスに影響しているとも考えられる。

以上の結果から、大学生を持つ家庭では夫婦間の共通した意志に基づく家庭関与を中心とした生活が夫婦関係、家族成員のストレス、家族機能形成に正の影響をもたらすことが示された。このことは、ライフステージにおけるBerman & Life (1975) の指摘する夫婦間の再調整の重要性の視点から捉えると、WLBに基づく家庭生活のあり方の重要性を改めて示唆するものと考えられる。

本研究では、大学生の家庭における夫婦のWLBがもたらす影響について検討を加えたが、予想したよりも明確な結果が得られなかった面もある。特に大学生のストレスへの影響は確認できなかった。これは、分析の上で夫婦のWLBを形態的に捉え、それとの関連性を求めたに過ぎないからと考えられる。このことについては、大学生が両親の家庭生活を通して、親から受ける精神的な影響に関する質問項目を入れる必要があると考える。具体的には、妻である母親や夫である父親の仕事と家庭関与の状況や夫婦としての両親の状況についてどのように感じているか、などの親の生活のあり方に関する大学生の内省面を探り、ストレスをはじめとする精神的変化との関連性を探る必要であると考える。それは、この時期は大学生の時間的展望の

発達に伴い、他者視点の取得の能力が高まる中で親性の基盤を形成していくことになるが、親がモデルとして存在し、種々のことを親から吸収して次のステージに進んで行き、次世代の親としての意識形成にも繋がる（奥田ら、2010）からである。

さらに、大学生のストレスについては夫婦関係と夫婦のストレスとの関連性から、クラスタⅡとクラスタⅠにおいて妻のストレスが関連することが示され、特にクラスタⅡでは「夫との一体感」も関係していることが読み取れる。このことは、「夫婦関係」と「夫婦のストレス」と「大学生のストレス」の間に関連性が存在することを示唆すると考えられるので、上記に示した大学生の内省面を探る質問を加えてこれらの各要素間の関連性についても分析をさらに進めることが必要である。

引用文献

- 青木聡子・岩立京子 2005 幼児を持つ父親の育児参加を促す要因：父母比較による検討
東京学芸大学紀要第1部門、56、79-85.
- Berman, E.M. & Life, H.L. 1975 Marital therapy from a psychiatric perspective, *American Journal of Psychiatry*, 132: 6; 583-592.
- Carter, B. & McGoldrick. 2005 *The expanded family life cycle; individual, family, and social perspectives* 3rd ed. New York: Person Allyn & Bacon.
- 井上輝子・江原由美子（編）2005 女性のデータブック 第4章一性・からだから政治参加まで— 有斐閣
- 金井篤子 2002 ワーク・ファミリー・コンフリクトの規定因とメンタルヘルスの影響に関する心理的プロセスの検討 産業・組織心理学研究、15（2）：107-122.
- 柏木恵子 1999 子どもの価値 東洋・柏木恵子編著 社会と家族の心理学 ミネルヴァ書房
- 加藤邦子 2005 男性における仕事と育児の両立要因— 充実感を持つためのモデルの検討— 家庭教育研究所紀要、26、110-127.
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達— 生涯発達の視点から親を研究する試み— 発達心理学研究、5（1）、72-83.
- Kizmann, K.M. 2000 Effects of marital conflict on subsequent triadic family interaction and parenting. *Developmental Psychology*, 36, 3-13.
- Lieberman, M., Doyle, A.B., & Markiewicz, D. 1999 Developmental patterns in security of attachment to mother and father in late childhood and early adolescence: Associations with peer relations. *Child Development*, 70, 202-213.
- 内閣府 2010 「男女共同参画白書」平成21年版
- 尾形和男 1995 父親の育児と幼児の社会生活能力— 共働き家庭と専業主婦家庭の比較— 教育心理学研究、43、335-342.
- 尾形和男 2007 家族システムにおける父親の役割に関する研究 風間書房
- 尾形和男 2010 父親のワーク・ライフ・バランスについての一考察— 夫婦関係、家族メンバーの生活、子どものワーク・ライフ・バランス観との関係— 愛知教育大学研究報告 教育科学編、59、1-8.
- 尾形和男・宮下一博 2000 父親と家族— 夫婦関係に基づく妻の

精神的ストレス、幼児の社会性の発達及び夫自身の成長発達— 千葉大学教育学部研究紀要、**48**、I：教育科学編、1-14.

奥田雄一郎・後藤さゆり・大森昭生・呉 宣児・平岡さつき・前田由美子 2010 「親になること」の今日的意義の再検討と青年期の為の次世代教育プログラムの開発：経過報告、共愛学園前橋国際大学論集、**10**、175-186.

Streich, M.L., Casper, W.J., & Salvaggio, A.N. 2008 Can we agree and still conflict? An examination of couples' agreement of work-family conflict. *Journal of Managerial Psychology*, **23**, 252-272.

菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 2002 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関係— 家族機能および両親の養育態度を媒介として— 教育心理学研究、**50**、12-140

山口一男 2007 夫婦関係満足度とワーク・ライフ・バランス 季刊家計経済研究、**73**、55-60.

謝辞

本研究の実施にあたり、科学研究費（基盤研究（C）（1）課題番号 23530661）を受けた。調査の実施にあたり、多くのみなさまのご協力を頂いた。

これらの方々に心より感謝申し上げます。

(2014年11月17日受理)